

令和元年6月3日現在

機関番号：12201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K04406

研究課題名(和文) 児童生徒の言語発達とレトリック研究を融合した作文カリキュラムの開発

研究課題名(英文) Development of a curriculum for writing compositions that combines students' language development and the study of rhetoric

研究代表者

森田 香緒里 (Morita, Kaori)

宇都宮大学・教育学部・准教授

研究者番号：20334021

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、児童生徒の言語発達とレトリック研究を融合した作文カリキュラムの開発を目的としている。研究成果として3点挙げる。(1)日本と英国の児童の作文を、相手意識及びコミュニケーション方略の発達という観点から比較・分析した。その結果、日本人児童の方が多様なコミュニケーション方略を用いること、また作文に表れる相手意識が、表記レベル・語レベルに集中していることを明らかにした。(2)この結果に基づき、文構成レベルの作文力育成に焦点化した作文カリキュラムを構想した。特にレトリック研究に基づく欧州の作文カリキュラム「プロギムナスマタ」に着目し、要約・構成に関わる作文指導法を開発・検証した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義を2点挙げる。(1)日英2国間で児童作文の比較分析を行った結果、日本人児童の方が、英国人児童よりも読み手に配慮し、読み手に伝わるような書き方を様々に工夫していることがわかった。書き言葉におけるコミュニケーション能力の違いが国際比較によって明らかになった。(2)レトリック研究に基づき開発された欧州の作文カリキュラム「プロギムナスマタ」に着目し、「要約」「構成」に関わる作文指導法を開発・検証した。レトリック研究の知見を取り入れることで日本の作文カリキュラムに系統性を与え、かつ(1)で得た児童のコミュニケーション能力の実態と発達に対応させることを意図した。

研究成果の概要(英文)：The objective of this study was to develop a curriculum for writing compositions that combines students' linguistic development and the study of rhetoric. (1) The compositions of students in Japan and England were compared and analysed from the perspective of developing audience awareness and communication strategies. The results indicated that students in Japan use more diverse communication strategies in their writing and that the audience awareness demonstrated in the compositions is concentrated at the expression and word level. (2) Based on these results, a curriculum for writing compositions was conceived with a focus on the development of compositional capabilities at the level of sentence structure. In particular, a composition instructional method was developed and verified in relation to summarizing and composing with a focus on the 'progymnasmata' that was European composition curriculum developed with a basis in the study of rhetoric.

研究分野：国語科教育学

キーワード：言語発達 作文 相手意識 レトリック カリキュラム 国際比較

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 相手や目的に応じた表現を身につけることは、従来国語科の中心的な目標の一つであり、とりわけ平成 20 年改訂以降の学習指導要領においてはこの点が強調されている。作文指導においても、相手意識を持たせるための試みがこれまで数多く実践され、そこでは相手（読み手）を設定することが「書く」というコミュニケーション行為を実質的に機能させる上で重要であることが指摘されている。

指導上の有効性を論じてきたこれまでの先行研究では、学習者が相手によって文章表現を変化させることは当然の前提条件となっており、それを期待した上での「相手」の設定となっている。では、相手が設定されることで学習者は自らの文章表現過程でどのような言語選択を行い、どのようなコミュニケーション方略を用いようとするのか？研究代表者はこうした問題意識のもとに、小学生から大学生までを対象とした作文調査を行い、相手意識と文章表現との関係を学習者の側からとらえることを試行してきた。

(2) 研究代表者は次の 2 点の課題意識でこれまで（研究開始当初の時点）研究を進めてきた。1 点目は、文章表現に表れる相手意識の実態とその発達過程の解明である。文章表現過程における相手意識の機能や表出の仕方は、学習者の発達段階によって異なるとの仮説を持ったからである。2 点目は、相手意識を核とする発達過程に対応した作文カリキュラムの開発である。学習者の文章表現力の発達については先行研究があるが、それをどのように作文カリキュラムに反映させ系統的な教育内容とするかといった議論は、管見の限りまだない。

そこで本研究では、レトリック研究の知見を援用して教育内容の系統化を進めることとした。レトリック研究では、古代ローマの文法学校において約 1500 年に渡って用いられていた「プロギュムナスマタ (progymnasmata)」という作文カリキュラムの研究成果がある。作文技術を系統化したこのカリキュラムを援用して、新しい作文カリキュラムを開発しようと試みた。

2. 研究の目的

本研究は、児童生徒の言語発達とレトリック研究を融合した系統的な作文カリキュラムの開発を目的とする。

具体的手段としては、まず相手（読み手）意識の発達と文章表現との関連についての諸研究（国語教育、日本語教育、認知心理学、社会言語学等）を検討し、児童生徒の文章表現力の発達が、相手意識とどのように関連しているかについての理論的基盤を得る。同時に、これまでに収集した児童生徒の作文データの再検討を行い、文章表現力の発達過程についての分析・検討を行う。また、古典修辞学及びレトリック研究における「プロギュムナスマタ」と呼ばれる作文カリキュラムに着目し、援用することで習得すべき作文技術の明確化・系統化を行う。

これらの作業を通して、児童生徒の文章表現力の発達段階と習得すべき作文技術の融合を図り、相手意識を核とした新しい作文カリキュラムの開発を試みる。

3. 研究の方法

(1) これまでに収集した、日本人児童の作文データおよび英国人児童の作文データを再検討する。相手意識の表出の発達過程を改めて検討するため、コミュニケーション方略という観点から再分析を行う。コミュニケーション方略という分析の観点の設定については、国語教育のみならず日本語教育の領域からも知見を得ることとする。児童作文の日英比較（国際比較）を行うことで、文章表現に表れる相手意識やコミュニケーション方略の特性を明らかにするとともに、その発達過程についても明らかにする。

(2) 国外におけるレトリック研究に基づく作文教科書、作文指導書を入手する。特に、古代ローマの文法学校から続く作文訓練法である「プロギュムナスマタ」について、研究代表者は『レトリック式作文練習法』という著書（明治図書、2004 年）として日本の高等教育で利用可能なように再編集した実績がある。プロギュムナスマタのような、古典修辞学を基盤とした作文教科書を入手し、作文技術の系統化について整理・検討を行う。

(3) また同時に、英国の現代作文教科書についても入手する。英国をはじめとする欧米の作文指導の内容には「プロギュムナスマタ」の影響が少なからず認められる。国内外の作文教科書を比較分析することで、作文技術の抽出と配列、指導内容について検討する。加えて、日本の作文指導における系統性に関しては、学習指導要領の分析や、現職教員らを対象としたインタビューなどからも検討を行う。

(4) 上記の成果をもとに、児童生徒の文章表現の発達過程、および作文技術の系統化を構成原理とした作文カリキュラムを構想する。また可能な限り具体的な指導内容を構想・試行し、有効性の検証を行う。

4. 研究成果

(1) 児童の相手意識の実態を探るため、相手意識がいつ頃どのような形で文章表現中に発生するのか、またその初期の相手意識が、文章産出過程においてどのような機能を有するのかについて

検討を行った。日本と英国の小学校低学年児童の作文を国際比較し、日本人児童の相手意識の表出の特徴について、以下のことを明らかにした。

低学年児童は、相手（読み手）が設定された時、「何を書くか」「どのような表記で書くか」に意識が向けられる傾向にある。つまり、日本人低学年児童の作文における相手意識は、主として話題選択と表記のレベルに比較的集中して向けられることがわかった。これに対し、英国人低学年児童の作文では、語に集中して意識が向けられる傾向にある。

このことは、書く過程における児童のメタ認知の範囲が日英で異なることを意味しており、日本人児童の作文において相手意識は、まず「何を」書くかの選択行為に結びつきやすい傾向にあり、相手によって「書きたい」ことを明確化していく機能をもつと結論づけた。

(2) (1)の成果に基づき、さらに日英の小学校低学年と高学年の作文を国際比較し、相手意識の発達過程を検討した。その結果、以下のことを明らかにした。

相手に応じた語句選択は、日英ともに学年が上がるにつれて増加する傾向にある。

英国人児童は、低学年では語に、高学年になると文構造に意識が向けられる。これに対し日本人児童は、低高学年ともに文章情報の省略という形で相手意識が表出される。

英国人児童の相手意識は、コミュニケーション方略の側面からはほとんど表出されないのに対し、日本人児童は様々なコミュニケーション方略を用いて相手意識を表出している。

これらのことから、日本人児童の方が、相手に応じた表現や方略をより多様なレベルで表出しており、日本人児童作文の発達の特性をここにみることでけると結論づけた。

(3) 日本の学習指導要領における「書くこと」の領域の目標と内容について、経年的に分析した。日本の作文指導における指導内容の系統性は、主として学習指導要領が示す「系統表」によって規定されている。「書くこと」領域の場合、「題材の設定」「記述」「推敲」といった文章作成過程が示され、それぞれの段階ごとに指導事項が示されている。この文章作成過程に即した指導法は日本の作文指導の一般的な方法として定着しており、「主題」「取材」「構想」「記述」「推敲」の5段階の作文指導過程が設定されていることを指摘した。同時に、指導過程だけでなく作文技術を明確化・系統化することの必要性も指摘した。

(4) 欧州で古代ローマ時代に開発され伝統的に採用されてきた「プロギュムナスマタ」（レトリック研究を基盤とした作文カリキュラム）を取り上げ、そこで求められている作文技術を抽出し検討を行った。その結果、再話、要約、例証が基礎的な作文技術として考えられており、その後、描写や論証・反論などの作文技術へと系統的に展開されていることがわかった。

さらに、作文技術の配列とその指導方法について検討した。その結果、基礎的かつ重要な作文技術として「要約」と「構成」が位置付けられていたことを明らかにした。その意義について、日本の作文指導への援用という見地から比較考察を行い、「要約」は様々な学習活動に必要な作文技術であること、「構成」は発達の自然には習得されにくい作文技術であることなどから、有効な示唆となると結論づけた。

このことは、(1)(2)の研究成果とも関連する。児童作文では、話題・表記・語のレベルで発達が見られるのに対し、文構成レベルではあまり見られない。認知心理学などの知見も合わせると、文構成レベルでの言語意識は自然にはなかなか習得されにくく、意図的な学習の必要性が指摘できる。こうした言語発達の観点から、「要約」「構成」の作文技術の段階的な指導内容について、重点的に構想することとした。

(5) (4)の成果を受け、特に小学校における「要約」の段階的な指導について開発・試行を行った。「要約」は、現行の小学校学習指導要領においては中学年の「読むこと」の領域に位置付けられている。説明的文章などの要旨をまとめる活動として「要約」文を書くことが求められている。しかし本来「要約」は目的のある言語活動であり、段階的に指導する必要がある作文技術である。そこで現職教員らからの意見聴取なども行い、小学校発達段階に応じた指導法を開発・試行した。具体的には、音声言語や絵本などを活用し、物語構造から論理構造へと要約の対象を移行させていくという内容である。

(6) 中学校段階においては「構成」の作文技術を中心に指導内容を構想した。まずその前段階として、中学生を対象にした作文調査・分析を行った。具体的には、2校の中学生およそ120名に意見文を書いてもらい、そこに用いられる構成（論証構造）について分析を行った。中学生が既に習得している論証（習得が容易な論証）と、段階的・意図的な指導が必要な論証とを区別するためである。分析はまだ終了していないが、データや経験を提示しただけの不十分な論証が目立つこと、また「定義」からの発想（トポス）による論証が目立つ等の傾向が見られた。

このことから、現行の国語教科書に掲載されている「構成」の要素には、日常生活において容易に習得できるものとそうでないものとが混在していることが明らかになった。残された課題は、これらの結果をふまえた中学校段階における段階的な指導法の開発・試行である。小学校の指導法と合わせて、引き続き研究を進めていく予定である。

〔雑誌論文〕(計5件)

森田香緒里、文章表現指導における作文技術の系統性に関する研究 -「プロギュムナスマタ」の検討を中心に-、宇大国語論究、査読無、29号、2019、85-98

森田香緒里、宇都宮市立清原北小学校、実践的コミュニケーション力の育成(2) -「会話科ことばの時間」のカリキュラム開発(高学年単元)-、宇大国語論究、査読無、28号、2017、89-102

森田香緒里、相手意識とパトスを基盤としたコミュニケーション力育成のためのカリキュラム開発、人文科教育研究、査読有、44号、179-196

森田香緒里、低学年児童作文における相手意識の発生と機能 -フォリナー・ライティングの国際比較-、国語科教育、査読有、80号、2016、31-38

森田香緒里、宇都宮市立清原北小学校、実践的コミュニケーション力の育成(1) -「会話科ことばの時間」のカリキュラム開発(低学年単元)-、宇大国語論究、査読無、27号、2016、16-29

〔学会発表〕(計1件)

森田香緒里、日英児童作文における相手意識 -発達の観点からの国際比較-、人文科教育学会、2017

〔図書〕(計2件)

塚田泰彦、甲斐雄一郎、長田友紀、森田香緒里 他、ミネルヴァ書房、初等国語科教育、2018、208

高木まさき、寺井正憲、中村敦雄、山元隆春、森田香緒里 他、明治図書、国語科重要用語事典、2015、279

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名:

ローマ字氏名:

所属研究機関名:

部局名:

職名:

研究者番号(8桁):

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。